

令和6年度 能美市立湯野小学校 学校評価

重点目標	具体的方策	主 導	【評価指標】 ＜成果指標＞ ＜努力指標＞	【評価の根拠】 達成度判断基準	取組状況	評 価	2学期以降に向けての改善策	後期評価	今年度の取組状況および達成状況	学校運営委員会からのコメント
1 組織的な学校運営	①【組織的な教育活動の推進】主任を中心にPDCAサイクルを機能させ、互いに連携した組織的な教育活動を推進する。	教 頭	【努力指標】 主任等を中心にPDCAサイクルを機能させ、互いに連携した組織的な教育活動を推進している。	【教職員アンケート】 「学校経営ビジョン実現のための各自の役割を認識し、組織的に取り組む、定期的な検証がなされている」と答えた教職員の割合 A 90%以上 B 80～90% C 70～80% D 70%未満	93.3% 主任が学校運営に参画意識を持ち、学校の業務や状況を踏まえた取り組みを進めている。校長ビジョン実現に向け、全校で共有すること意識し、学校全体が動いている。	A	昨年度から、毎週1回定期的な主任会を行っている。月主任会では、弊校の課題や、各部の進捗状況を共有している。今後有効な会になるように進めていく。	A	93% 学校経営ビジョン実現化のために、各自が役割を自覚できるように、主任がきめ細やかに部の運営を進めている。今後、さらに「検証」への意識を高め、次の取組に確実に生かしていく。	・各主任が経営ビジョンの実現化のために担当の部会で何を、どのように進めていけばよいかを具体的に把握されている。 ・組織が活性化している様子に感銘を受けている。運動会などの行事を見せてもらう中で組織力の高さを感じる。 ・前期にAIに達している。後半はSを目標により高度な目標を掲げるとよい。
	②【働き方改革の推進】タイムマネジメントの意識を高め、教職員の専門性を生かし、業務改善の取組を推進する。	教 頭	【努力指標】【成果指標】 教科担任制、行事や会議の精選・統合化、ICTの効果的活用、スキルの共有、業務の平準化に向けた取組等を行い、業務全体のスリム化を図ること、時間外勤務時間の短縮を目指す。教職員一人一人がタイムマネジメントの意識を持ち、見通しを持って業務を行っている。時間外勤務時間も前年度同時期に比べ減少し効果が現れている。	【教職員アンケート】 「自身は、タイムマネジメントの意識を持ち、見通しを持って業務に取り組んでいる」と答えた教職員の割合 A90%以上かつ②の時間外勤務平均が前年度同時期に比べ減少 B80～90% C70～80% D70%未満 【勤務時間調査】	86.7% 時間外勤務平均時間4月R5【52h】R6【49.4】5月【43.6】6月【42】と時間外平均は前年度に比べ、減少はしているものの、ICTの効果的活用、スキルの共有、業務の平準化に向けた取組を推進していきたい。	B	業務の平準化に向け、主任会で年間の行事担当、取組を洗い出し、担当部署を改めて考え直す機会をとる。働き方改革に向けた見えやすい部分と見えにくい部分（組織風土）両方に目を向けて働き方改革を推進していく。	A	100% 教職員一人一人がタイムマネジメントの意識を高めている。見通しをもった業務を行うことがタイムマネジメントにも繋がることを主任会でも共有し、早めの提案を心掛けている。また、各部からの年度ふりかきりから、取組を精選し来年度に向かう。時間外勤務の状況は9月34時間（33）10月37時間（39）11月38時間（39）12月27時間と各教員の意識の高さが成果となっている。	・職員一人ひとりの意識の高まりがよい。 ・ただ単に時間外勤務の短縮が重要ではない。「見通しをもつ」「早めの提案」「取組の精選」という視点がよい。今後さらに、働き方が改善するためのテーマを見つける努力を心がけるとよい。 ・仕事を家に持ち帰っている時間は数字には現れていない。 ・残業時間を平均で評価しているが、個人差があるはず。高学年担任や教頭は本当に休めているのか、見えてこない部分に目を向け、教育の質があがるような本物の「働き方改革」を進めるべき。あれもこれも求める体質を改めるべき。
	③【学力向上に向けての体制確立】 学力向上プランを有効的に活用し、基礎基本の定着と活用力の向上を図る。	教 務	【成果指標】 学期末20問検定（漢字・計算）での平均点が90点を超えている。	【2つの検証結果の組み合わせ】 各学年の学期末20問検定（漢字・計算）を全校平均点で表した結果 A 90%以上 B 80～89% C 70～79% D 70%未満	90% 毎月検定・計算検定ともに90%という結果であった。朝のさわやかタイムでの学習の習慣や放課後学習による個別指導の時間を確保したことが結果に表れていると考えられる。	A	学年よって結果に差がみられたことから、さわやかタイムの内容を全校で統一し、確実に習熟の時間が確保できるようにする。また、算数における重点単元について、単元前、中、後において苦手な児童を支援する活動を行う。また、活用力の向上に向け、午後の帯タイムを使って、活用問題に定期的に取り組んでいく。これらの取組により、1学期以上に子供たちの学力が身に付くようになる。	A	82%（+2%） 漢字検定93%、計算検定91%という結果であった。2学期から予定単元にさわやかタイムの内容を提示し全校で教科を統一したことで、偏りなく学習する時間を確保することができた。また、放課後学習や学力補充タイムについても計画的に取り組むことができた。今後も継続していくことで、子供たちの学力が身に付くようにしていく。	・単元前、中、後に個々を見ていくと、効果的。より高いものを指し目標を設定してほしい。 ・朝や午後の帯タイムには到達しないや0の児童への支援は確実に行ってあげてほしい。 ・漢字、計算の検定結果から本校児童の基礎学力は確実に向上しており、うれしく思う。これからより確かな学力育成のための、効果的な取組を継続してほしい。 ・「誰一人取り残さない」の実践を確実に進めてほしい。
2 確かな学力の育成	④【主体的に学び、自己を見つめ直す児童の育成】 重点をもとにした指導で、以下の3つの力を育成していく。 ①考え、関わり合い学ぶ子 ②自分も人も大切にすること子 ③ねばり強く学ぶ子	研 究	【努力指標】 3つの力を具体化した姿で児童と共有し、推進していく。 【成果指標】 ①考え、関わり合い学ぶ子 ②自分も人も大切にすること子 ③ねばり強く学ぶ子	【児童アンケート】 児童アンケートで以下の項目で肯定的に回答した児童の割合 ①話し合う中で考えを広めたり深めたりすることができている ②自分も人も大切にすることができずか ③学習をふり返りながら、目標に向かってがんばっている A 90%以上 B 80～89% C 70～79% D 70%未満 【教員アンケート】 児童アンケートでの割合 道徳の授業で、主体的な対話が見られる度合いは？ A 90%以上 B 80～89% C 70～79% D 70%未満	【児童】 1低学年89.5 高学年80.5 2低学年95.8 高学年92.7 3低学年93 高学年89.9 どれも8割以上で高いが研究部で5月にアンケートを実施した際にはさらに高かったの敬減 【教員】 77%の教員が授業の8～9割で主体的な対話が見られると回答。0評価、研究部で実施した5月アンケートの段階では、4～6割が多かったの、主体的な対話は年度当初より見られるようになってきている。	児童B 教員C	アンケートの中で①話し合う中で考えを広めたり深めたりすることができていますか。①の項目が低く、5月と比較しても高学年では9ととなっている。児童は、考えを広めたり深めたりすることへの意識が低かったりその有用性を感じていない可能性がある。友達との対話で、考えを広め深めることが、学びを自己調整しさらに高めることに必要不可欠。広げ深まった経験から自分や友達の意見の大切さを感じることができ、つまり②③の項目のためにも①を向上させることは大切。そこで、月一度、友達との対話のおかげで考えが広まり深まったと実感できる姿を全校で持っていく。児童のふり返りから、対話や学び合いの良さを実感できるようにする。	児童A 教員B	【児童】 ①低学年88.3 ②高学年91.7 ③低学年91.1 ④高学年94.7 ⑤低学年98.4 ⑥高学年90.9 どれもほぼ100%とみてOK評価。 低学年では③がほとんどが「あり」、高学年ではどの項目も上がった。 【教員】83%の教員が授業の8～9割で主体的な対話が見られると回答。8評価、前回の評価を継いで、全校でササッスパーティーと称し、対話することで学びが深まり、対話をした友達に、意見をくれた友達に感謝する取り組みを行った。その取り組みが高学年から発信していたとも思われる。高学年が上級生、低学年では、学びをふり返りながら目標に向かっていく③の項目が大き上昇。いずれにしても主体的に学びに向かっていると考えられる。高学年の友達の自分より大切にしていますという項目が下がったのが気になる。教員が意識して良い環境を取り上げる必要があるのかもしれない。 道徳授業力向上を目指し、教員一人となり努力してきたことが、功を奏して主体的な対話を入る授業づくりの意識が高	・今年度は道徳の授業で主体的な対話をつくることを目指してきたが、全職員一人ひとりが取り組んでおり、必ず児童の学びが向上していくものと思う。教員のチームワークを大事にしながら湯野で学んだ教育スキルをさらに強力なものにしてほしい。 ・道徳を研究したことで教員の授業力、児童の受容力がのびている。この1年の研究を生かし、より高い教科指導や行事への取組に繋げてほしい。 ・年間を通して目標を達成するために途中評価の「0」を恐れないでほしい。改善、分析により1年かけて取り組めるような高い目標を掲げるべき。その際、児童と教師の評価の両面から見ていく。ICT、アナログとデジタルとの調和、デジタルでの学びを話し合い活動に繋げていく。 ②の質問項目「友達も自分も大切にしている」というのは、具体的にどんな行動と教員が理解しているのか、具体的にイメージを教員同士で話し合い、イメージできるかどうかできるかが大切。質問内容を吟味するとよい。
	⑤【不登校・いじめ対応】 児童理解や指導・支援の情報を共有し、全教職員で組織的な対応をとり、不登校やいじめの未然防止、早期対応に努める。	生徒指導	【満足度指標】 毎月1回学校生活を送り、90%以上の児童が学校生活が楽しいと感じている。 学級に児童の居場所があり、一人ひとりが学級生活に満足している。	【児童アンケート】 毎月1回に友達アンケートを実施し、「当てはまる＋まあまあ当てはまる」と答える児童の割合 A 95%以上 B 85～94% C 70～84% D 70%未満	88.8% 毎月初めに友達アンケートを実施し、「当てはまる＋まあまあ当てはまる」と答える児童の割合 A 95%以上 B 85～94% C 70～84% D 70%未満	B	いじめ認知会や児童理解の会で共有したことを実践していく。取り残される児童を継続して見取るために、幅広く共有できるシートも活用していく。	A	93.6%（+4.8%） 月一回の友達アンケートやいじめ認知会運営計画・継続的に行う「いじめを克服しよう」を徹底してほしい。 ・縦、横、斜め、面での取り組みが重要。共有したこと実践していく。学校に全員登録できたという場面が見られるようになったと聞き、大変うれしい。 ・「学校が楽しい」と感じている児童が100%になるよう手立てを考え実践していくことが教員だけでなく、地域にも求められていると捉えたい。地域でできることがあれば、学校一体となり取り組んでいきたい。	・小学校でも教科担任制が導入されていると聞くと、その場合「共有」が難しく、「共有」がしづかりに行っているところがすばらしい。今後も「共有」を徹底してほしい。 ・縦、横、斜め、面での取り組みが重要。共有したこと実践していく。学校に全員登録できたという場面が見られるようになったと聞き、大変うれしい。 ・「学校が楽しい」と感じている児童が100%になるよう手立てを考え実践していくことが教員だけでなく、地域にも求められていると捉えたい。地域でできることがあれば、学校一体となり取り組んでいきたい。
3 豊かな心と人間関係力の育成	⑥【主体的に行動する児童会、学級会活動】 授業や学級活動、児童会活動等で、生徒指導の4つの視点を生かし、自己有用観や温かい人間関係を育む。	生徒指導	【努力指標】 クラス会議・学級活動・児童会活動に自分から進んで取り組み、楽しむことができる。	【児童アンケート】 一学期は、企画運営委員会を中心に「湯野」や「ハロー」をテーマに大会などを実施することができた。夏休みには、1学期にクラス会議でしてきたことを生徒指導の校内研で交流する。	90% 一学期は、企画運営委員会を中心に「湯野」や「ハロー」をテーマに大会などを実施することができた。夏休みには、1学期にクラス会議でしてきたことを生徒指導の校内研で交流する。	A	クラス会議では、夏休みに交流したことを用いて、各学級の思い出に内容を加えていく。また、前年度で終わっていた児童からの「湯野」や「ハロー」を実施できるように早めに計画を立てていく。	A	93%（+3%） クラス会議は、各学年、隔週ごとに実施している。今年度は、前年度中止となっていた「湯野」や「ハロー」を12月に行うことができた。12月には希望募金を児童会と4年生がコラボ（募金をした方に九谷焼をプレゼント）して行った。その後、正統な学校と交流を行った。	・子供達の温かい人間関係を育む取り組みや学校や学級に居場所をつくることに貢献している学校、学級づくりに尽力している学校を模範とし、これからは継続し、進化、発展させていこうと思いたい。 ・児童主体の様子が「6年生を送る会」でも見ることができた。
	⑦【体力づくり】 児童が主体的に取り組む体力づくりや体育的行事の工夫・実施に努める。	保健主事	【成果指標】 体力テストの「反復横跳び」において、4年生以上の平均が2023年県平均より1回以上上回る	【体力アップ取組】 4年生以上の平均が2023年県平均よりA 県平均より1回以上上回る B 県平均より0.5回以上上回る C 県平均より0.2回以上上回る D 県平均より1回以上上回る	4・5・6年生で体力テストを実施した。また、授業初めの準備体操後に、反復横跳びを1週間1日取り入れ、4年生以上の平均が2023年県平均よりプラス0.9回を達成した。（全校平均43.16回）	B	2学期も継続して体育の時間に取組を行い、継続性を高めていく。	A	体育館に反復横跳びのラインを貼り、継続して反復横跳びに取り組んだ結果、県平均よりも、2学期の学校平均が2.47回上回った。（全校平均44.7回）来年度もこの水準を保つていけるようにしていきたい。	・「反復横跳び」を指標としたことがA評価となった原因の大部分を占めていると思う。繰り返し取り組むことで、伸びやすい科目を選び、次年度以降も体力向上を目指してほしい。 ・見える化「全体の中で評価する場」にこのような成績で効果的である。担当は、各クラスの現状、進捗状況を常に把握し、発信していくことが大切。体力向上は、担当の掛けかけ、アンテナの高さが、直結する取組である。取組結果は担当の意識の高さと比例するのでがんばってほしい。
	⑧【自己管理能力の育成】 基本的な生活習慣（メディアコントロール）の確立を目指して取組を進め、自己管理能力を育成する。	保健主事	【成果指標】 保健委員会や学級での働きかけを受け、各家庭がメディア利用についてのルールを決め、決めたルールを守って利用している。	【児童アンケート・保護者アンケート】 学校のメディア取り組み期間中「メディア利用について家庭で決めたルールを守って利用している」とした割合 A 90%以上 B 70～80% C 60～70% D 60%未満	73% 児童保健委員会の取り組みで、各学級の児童がメディア利用について家庭で決めたルールを守って利用している」とした割合 A 90%以上 B 70～80% C 60～70% D 60%未満	B	メディアの取り組みの参加率が低下している。CD評価している保護者の多くは、取り組みに参加しない児童や参加しているが、達成率が低い児童の保護者であった。期間中、「保護委員が参加及びルール達成の意識向上をねらいとした放送を行う」「先生のメディアとのかかわり方紹介など、全校で取り組む環境を作りたい。	B	保健委員会を中心に児童主体の取組として行った。低下していた児童の参加率を向上し、ルール達成の意識向上がみられた。保護者のアンケートの内訳では、「よくあてはまる」との回答が増加した。しかし、保護者のメディアに対する考え方が多様になっており、昨年度よりルールを守って利用しているとの回答した割合が、低下している実態もある。	・メディアコントロールの大切さ（＝依存症になった時の怖さ）を啓発するための講演会などを考えてほしい。 ・メディアなどへの向き合いのよい考え方を考えることができる児童を育てることが学校の使命である。メディアとの関わり方をコントロールできる人、少なくとも「メディア奴隷」にならない様、学校から家庭への発信が大事だと実感している。 ・メディアの浸透と弊害、家庭の個別化、多様化、学校が取り組む難しさなど、様々な問題を抱えたテーマで。全てを完結していくことは難しい。せめて学校は、情報を与える機会をつくる。講演会や学校からのお便りなど、すべての家庭に改善を求めようとせず、あきらめことなく、できることを継続して行っていく。
4 健やかな体の育成	⑨【ふるさと教育の推進】 育友会や学校運営協議会との連携、協働を図る。	教 頭	【努力指標】 地域人材を活用した教科、学活、総合的な学習などの授業を行い、特色ある教育や専門的な指導を推進している。	【教員アンケート】 地域人材を活用した教科、学活、総合的な学習などの授業を行い、特色ある教育や専門的な指導を推進している。1学期は4年生が地域の九谷陶芸作家さんから話を聞く特色ある授業も行うことができた。	100% 地域人材を活用した教科、学活、総合的な学習などの授業を行い、特色ある教育や専門的な指導を推進している。1学期は4年生が地域の九谷陶芸作家さんから話を聞く特色ある授業も行うことができた。	A	2学期もこれまでの取組に加え、道徳のゲストティーチャーなど、様々な場面で地域を主とした授業を計画、実施していく。また、校内掲示などから地域を主とした授業に児童が興味をもてるよう工夫していきたい。	A	93% 今年度は「いしかわ道徳」（県指定）の授業でこの九谷焼のゲストティーチャーと共に授業を企画できたことがよかった。地域の人々から児童が気づく授業も多々展開された。今年度実施した授業について年間計画にも残し、次年度の計画に位置づける。	・地域力を活用しようという姿勢はすばらしい。連絡調整など時間がかかることも多いと思うが、地域教材を活用しようという意識がうれしい。 ・6年生を送る会でも「地域の学び」を上手に発信している学校が多かった。地域の人々から児童が気づく授業も多々展開された。今年度実施した授業について年間計画にも残し、次年度の計画に位置づける。 ・よい取組は継続していく。評価できないものは、原因を探り、改善または、転換、なくしていく意識で。
	⑩【ふるさと教育の推進】 ゆのっ子プランをもとに、地域の自然や文化、人材をいかしたふるさと教育を推進する。	教 務	【努力指標】 ふるさとの人、もの、こととの関わりを学習の機会を持ち、ふりかえりを交流し合うことで、地域を大切に思う心情を育む教育を推進している。	【児童アンケート】 「学校評価のアンケート「私は、能美市や自分の住んでいる町のことを大切に思っている」に対して肯定的に答えた児童の割合 A 90%以上 B 80～89% C 70～79% D 70%未満	94% ゆのっ子プランにおいて地域に関わる学習を取り入れている。各学年の児童の割合 3年（ふるさと自慢） 4年（九谷焼） 5年（地域の米づくり） 6年（地域の町づくりを考える） これらの学習が、地域を思う気持ちを生んでいると考える	A	2学期もゆのっ子プランをもとにした、学習を計画的に推進していくことで、地域や地域の方々とふれあいがあがり、地域を大切に思う心情を育んでいけるようにする。	A	97%（+3%） 3年（ふるさと自慢） 4年（九谷焼） 5年（地域の米づくり） 6年（地域の町づくりを考える） 各学年が町たんけんや他校との交流など地域とつながりながら学習を進めてきたことで、地域を大切に思う心情の育成に結びついたのではないかと。来年度も今年度の反省をいかしながら、計画的にゆのっ子プランの充実を図ってきたい。	・地域で学ぶことの有意義な点は、色々ある。達成状況の欄の「地域を大切に思う心情」が育っていることを大変うれしく思う。 ・児童に地域での学びが得たことを色々な方法で、発信して、学びをさらに深めてほしい。 ・発信することで、自分事となり、自分のものとなっていく。ゴールは「誰に発信したいのか」という投げかけも有効。